SURE 静岡大学学術リポジトリ
Shizuoka University REpository

耳の聞こえぬ蛇：中上健次「蛇淫」を読む

メタデータ	言語: ja 出版者: 静岡大学人文社会科学部翻訳文化研究会 公開日: 2023-03-20 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 渡邊, 英理 メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.14945/00029534

耳の聞こえぬ蛇

――中上健次「蛇淫」を読む

渡邊 英理

中上健次の小説世界には、少なくない動物たちが登場する[1]。その世界には、鳥、熊、犬などがたびたび顔をだすが、それらと並んでしばしば姿を見せるのが蛇である。その小説世界に蛇がはじめて十分な存在感をもって登場したのは、初期小説の「蛇淫」であろう。「蛇淫」は、雑誌『文藝』一九七五年九月号に発表された短篇小説である[2]。視点人物である息子・順の恋愛をめぐって息子と両親が相克する様を描く点で一種の家族物語（ファミリーロマンス）として読まれる小説だ。広く知られる通り、「蛇淫」は上田秋成の『雨月物語』中の「蛇性の婬」を下敷きにしている[3]。自らの物語／差別への争闘を模索していた中上は、一九七二年から書きはじめられた「物語の系譜」において、秋成をその争闘の先駆者として見いだしている[4]。敬愛する先達、秋成の筆になる「蛇性の婬」を書き換えつつ中上が記した小説が「蛇淫」である。

「蛇性の婬」の前半の舞台は、中上の故郷新宮である。中上の「蛇淫」もまた同じ新宮を舞台とするが、実際に起こった「親殺し」の事件の翻案によって紡がれるその物語の時空は、小説発表時と同時代と思しき「現代」におかれる[5]。また「蛇性の婬」と「蛇淫」はいずれも、蛇の形象を「女」の身に付与するが、しかし、そこには微妙だが同時に決定的とも言える差異がある。

「蛇性の婬」において、蛇は女の「本性」として描かれている。ここで蛇と形象され

---

[1] 中上健次の動物論の一面は、拙著『中上健次論』「第二章　動物と私のあいだ――「鴉」「熊の背中に乗って」」（インスクリプト、二〇二二年）にて論じている。

[2] 初出は『文藝』一九七五年九月号。単行本『蛇淫』は翌年河出書房新社より刊行。

[3] 「蛇淫」の典拠「蛇性の婬」、その翻案については、四方田犬彦『貴種と転生・中上健次』（増補改訂版。新潮社、一九九六年→ちくま学芸文庫、二〇〇一年）、高田衛『女と蛇――表徴の江戸文学誌』（筑摩書房、一九九九年）、嶋田彩司「典拠と批評――「蛇性の婬」と中上健次」（『国文学研究』一三六、二〇〇二年）、旦部辰徳「中上健次「蛇淫」論――「事実の肯定」をめぐって」（『あいだ／生成』八、二〇一八年）など。なお、「蛇」を表象する日本語文学については、『紱説Ⅲ18――特集・動物』（花書院、二〇二〇年）中の坂口博「巳」に詳しく、「蛇淫」についても言及がある（四二～四五頁）。

[4] 初出は、『國文学　解釈と教材の研究』一九七二年四、五月号。中上は同誌の連載「物語の系譜」において、佐藤春夫、谷崎潤一郎に続いて上田秋成を論じている。一九八三年に冬樹社より刊行された単行本『風景の向こうへ』に収録。

[5] 一九七四年に千葉県市原市で起こった二十二歳のレストラン経営者による両親殺害と死体遺棄の事件（高澤秀次「改題」『中上健次集二』インスクリプト、二〇一八年、六〇〇頁）。同事件を報じる新聞記事を素材に「蛇淫」を創作したことを、中上は、エッセイ「夢の力」で明示している（初出『文學界』一九七六年七月一日、『中上健次集二』同書、五〇一頁）。

る女とは、官吏であった夫を亡くして一人で新宮の里の館に住まう女性、真女児だ。ある時、新宮は三輪崎の網元の次男、豊雄は真女児に出会う。雨宿りで立ち寄った漁夫の家で真女児を見た豊雄は、その美しさに一目で魅了される。雨宿りの翌日、真女児の館を訪れ、ふたりは交わり、結婚の契をする。しかし、豊雄の親の反対を契機に、ふたりの仲が引き裂かれるにしがたい、女は邪神で、年老いた蛇であることが判明する。

「蛇性の婬」における蛇。それは、怪しく謎めいた他者としての女の表象として現れる。そして、男を誘惑し破滅へと導く女に与えられた表象という意味で、真女児の蛇は、「宿命の女（ファム・ファタル）」の定型的表象と言えるだろう。ここでの女は、男性の性的欲望の対象であるが、男性主体に脅威を及ぼす他者として嫌悪されている。真女児に与えられた蛇の形象とは、女性嫌悪（ミソジニー）の徴として読まれうる。しかもそれが年老いた蛇である限り、その徴には性差別に年齢差別が加わる。また動物を他者化する人間中心主義もそこには絡まる。「蛇性の婬」は、動物を客体化することで立ち上げられる人間主体の暴力性と、性や年齢をめぐる差別の構造、その複合し重層化する差別の有り様そのものを可視化している。

「蛇淫」においても蛇の形象は女に付される。しかしながら、その表象のあり方は少しく異なる。「蛇性の婬」で眞名児との結婚に豊雄の親が反対したのと同じく、「蛇淫」において、恋人ケイとの交際を主人公・順の両親は許そうとしない。順とケイは、同じ「駅裏の路地」で育った「幼なじみ」のような間柄にあった。現在二七歳で、路地の外で暮らす順は、両親の出資で「国道沿い」にスナック「キャサリン」を出店し、その店の「ウェイトレス」にケイを雇う。ケイは「まるっきり右耳がきこえない」ため、「なるたけ、人の目に自然に映るように、きこえる左耳の方を前に出す」。ケイの「母親はアル中」で、自宅に「アル中の男を、引っ張りこんでいた」。スナック「キャサリン」に勤める以前、ケイはパチンコ屋に住み込みで働いていた。当初、順とケイは恋人同士ではなかったが、順とケイの関係を順の両親が勘ぐったことをきっかけに、順はケイに惹かれるようになり、ふたりは交際するようになる。このように息子の交際と親の反対という運びにおいて、小説「蛇淫」は、「蛇性の婬」と同型の物語を象る。しかしながら、旦部辰徳が指摘するように、「蛇性の婬」の豊雄が、親という「法・制度」に従うのに対して、「蛇淫」の順は、親の「法・制度」に反発し、はずみで両親を殺してしまう[6]。親という「法・制度」に子が敗れる物語を「蛇性の婬」が象るのに対し、「蛇淫」は法制度たる親への子の反逆を、息子による「親殺し」として現象させている。

「蛇淫」において蛇の形象は、順の親、とりわけ母親によって、ケイという女に与えられている。

「覚悟しなさいよ、お父ちゃん怒っとるから。とめんからな、お母ちゃん」それか

---

[6] 旦部は、前掲論文において、「蛇淫」を字義通りの「親殺し」が行われる「特異なテクスト」と定位したうえで、「子」の「弱さ」を描く小説として捉えている。旦部によれば、「蛇淫」は、「親殺し」を実行し「躊躇も反省も垣間見せず」その「事実」を「肯定」する秋成の「樊噲」ではなく、「親殺し」を行わない「蛇性の婬」を直接の典拠とすることで、「親殺し」を実行しつつも、その「事実の肯定」にまでは至らない「子」の「弱さ」を描こうとしたと述べる。

ら声を押し殺して言う。「なんや、あのスベタ」水をでも引っかけてやってもよかった。彼は母の言葉を無視した。「あの女、悪意を持っとんのよ、うまい具合に行って、貧乏から這い上ったわたしらにヤキモチ焼いとんのよ。おまえは、ひっかかって、とりつかれてるんや」母は彼の顔をみつめたまま、言った。注文をきいていた女が、母にそうなじられているのも知らず、 「順ちゃん、ヤキメシがひとつと、カレーライスがひとつと、コーラ二つ」と歌うように声をあげる。「蛇や蛇、あの女は蛇。淫乱」母は首をふる。その母がわずらわしく、「もう帰れ」と彼は言う[7]。

女に店を頼んで、彼は家へ行った。十一時、父と母に意見された。その女の耳のことで、喧嘩になった。あげくの果、灰皿で、二人を殴りつけた。あっけなかった。父が駅裏の連中から情報を仕入れてきたのだった。女の耳は、女が中学三年の時、母親がひっぱり込んだ男に手ごめにされ、その現場を母親にみつかり、それで母親からぶったたかれた。鼓膜が破れた。「どうや、気づかへんか」父は言った。
「あの女は淫乱なんよ、蛇なんよ」母は言い募った。「お母ちゃんらは、そのはなし、とっくに知ってたんよ」[8]

ケイとの交際に順の両親が反対する理由は、まず、ケイが「駅裏の路地」の生まれ育ちだという一事にある。順の両親も順自身もまた、かつては「バラック」の「破れ長屋」が立ち並ぶ「駅裏の路地」に暮らしていた。もとは「材木かつぎ」で生計をたてていた順の父は、「材木業界、山林ブローカー」など、「インチキペテン」も辞さない手練手管で「成上り」、「市会議員」や「商工会議所の役員」に立候補するまでに至り、現在は、路地の外にでて、「小山を削りと」って建てた邸宅に暮らしている。

路地の文学として知られる中上文学において、「蛇淫」は路地という空間をその作品世界の重要な構成要素として最初に描いた小説として位置づけられるが、この小説は、作中の路地を、被差別部落をモデルに虚構化された空間として読むことを許容している。実際、「蛇淫」の順や順の両親の形象は、『熊野集』に描かれる、路地の外へ転居した、生身の作家・中上と相似形の「私」の親族の物語や、「岬」『枯木灘』『地の果て 至上の時』で「材木かつぎ」から「成上り」高台に邸宅を建てた浜村龍造の物語と重なるものである。

「うまい具合に行って、貧乏から這い上ったわたしらにヤキモチ焼いとんのよ」という順の母の言葉には、階層上昇によって、自分たち家族が路地を「脱出」したことへの疚しさや罪障感が浮かび上がる。同時に、息子とケイの交際に反対する順の母に見られるのは、一般地区の人々が被差別部落の人々との結婚に反対する、結婚差別という行為であろう。この時、順の母は、もとは住人であり自らその一員であった路地の人々を差別する。しかも、その行為はまた階層上昇をなしえた女性による、それができない女性への差別をもはらみ持っている。「蛇淫」において順の母が行う結婚差別は、重層差別や複合差別――被差別者が同じ境涯のより周縁的な被差別者を差別する、あるいは、部

---

[7] 『中上健次集二』前掲書、三五七頁。
[8] 同書、三五八～三五九頁。

落差別・階級差別・性差別など複合的な要素が絡み合って差別する――の問題として読み解かれるだろう[9]。

順の母は、ケイの右耳が聞こえなかった原因として、ケイが「中学三年の時、母親がひっぱり込んだ男に手ごめにされ」た出来事をあげ、そして「あの女は淫乱なんよ、蛇なんよ」と言いつのる。地の文の語りを字義通りに受け取るなら、この母の言葉は、セカンドレイプの言説である。地の文の「男に手ごめにされ」たとの言葉は、ケイが合意のないかたちで性行為を強いられた、すなわち、性暴力を受けたという一事を示している。にも関わらず、「あの女は淫乱なんよ」と述べる母親は、その原因を女の「淫乱」性に帰してしまう。これは、性暴力を受けた女性に対して、被害者のほうにも隙があったのではないかとか、男性を性的に誘惑する言動や服装をしていたのではないか、などと非難する二次加害の言説と同型であろう。順は、こうした女の過去を告げ、ケイとの恋愛を諦めさせようとする両親と「喧嘩」になる。結果、順は、灰皿で両親を殴りつけ殺してしまう。この時、順の親殺しが遂行的に達成するのは、親の口を物理的に塞ぐことで、ケイを誹謗中傷する言葉を堰き止め、彼女に対するセカンドレイプをとめることであったと言える。

上においてケイは、性暴力を受けた被害者であるにも関わらず、蛇の形象を与えられている。女性を他者化し有徴化するこうした表象の力学を、中上が批判的に対象化していたことは、そのような表象を行う当の母親の口を塞ぐ「蛇淫」の説話論的経緯からも推測できる[10]。

「あの子は天成の嘘つきなんよ。男をたぶらかせるためにやったら、どんな嘘でもつくし、どんなことでもする」。順の母は、ケイについてこう述べる。たしかにケイは、順に対して、右耳が聞こえなくなった理由として、「子供の時、うちに植えとったいちじく一つ盗ったら、殴られた」からと虚偽の説明をする。しかしながら、この虚偽の言葉は、レイプという自らが被った性暴力を秘匿するための虚構である。人に知られたくない外傷的な出来事を秘し、そして、そのトラウマから自らを守るために必要とされるという意味で、言わば生き延びるための虚構だと言える。

後年の『地の果て　至上の時』においても、ケイと同じく性暴力の被害者であるモヨノオバの声ならざる声が掬い／救いとられている[11]。「佐倉に居る頃孕んだのかそれともモ

---

[9] 上野千鶴子「複合差別論」『岩波講座現代社会学15　差別と共生の社会学』一九九六年、岩波書店→『差異の政治学』岩波書店、二〇〇二年。

[10] この点について、柄谷行人は、中上の短篇連作集『化粧』中の「浮島」をひきつつ、次のように述べている。「ここで、中上が興味深いことをいっていることは確かである。つまり、彼は、「道成寺伝説」あるいは「蛇性の婬」は、インドから来た父権的な思想であって、本当は原型的ではないこと、原型的なのは、むしろその逆ではないかというのである」。柄谷行人「差異と反復」『坂口安吾と中上健次』太田出版、一九九六年、一九一頁。

[11] 『地の果て　至上の時』は新潮社「純文学書下ろし特別作品」の一巻として、一九八三年に刊行。なお、本文中の『地の果て』の分析は、拙著『中上健次論』「第九章　仮設と雑草」による。

ヨノオバが満州にいる頃に生んだのか」。モヨノオバは、レイプの事実を秘匿するべく時に作り話を語り、またモヨノオバが育てる良一の出生も曖昧化されたままだ。中上は、生き延びるために必要とされるこのような虚構を、その文学的言語の枢要な構成要素としたのである。

ケイの身体とモヨノオバの身体、この交差しあう女性身体は、レイプによって被傷性を帯びた女性身体の遍在性を物語るものだ。『地の果て』において、その身体は、レイプという暴力を振るわれた女たちの「痛めつけ」られ「殺された」に等しい痛みを抱えた身体の群れと折り重なり、路地の女のものであると同時に、戦時中に日本軍によって性暴力をふるわれた「アジア」の女にもつながっている。女たちは、その被傷性において重なりあい共振している。

そして現在においてもその事態は基本的に変わるところはないのではないか。負の「男性性」は、機会があればいつでもその力を誇示せんとしているだろう。だからこそ、中上の小説は、負の「男性性」の遍在そのものを繰り返し描いたとも言える。そして、同時に、中上の言葉は、その暴力を被る女たちの声ならざる声と、傷ついた身体が必要とする生き延びるための虚構とを掬い／救いとっている。「蛇淫」や『地の果て』、これら中上健次の小説を読むことは、この現在も続く暴力を批判的に対象化することと同位であり、傷ついた者たちの生存の支えを求めることにつながっている。